

特集

最強の ブフンドを 育ててる

キックマン社長

堀切功章

三越伊勢丹ホールディングス社長

大西洋

近畿大学広報部長

世耕石弘

デザイナー

コシノジュンコ

エッセイスト、作家

阿川佐和子

パナソニック副会長、PHP研究所会長

松下正幸

特別
対談

シリーズ◆ 幸之助さんの教えに学んだこと

長榮周作 パナソニック会長





南泉が猫を斬る！

現実をとらえる

ために

ビジネスにおいて悩みや壁にぶつかった場合、それをどう乗り越えるか。公認会計士として数々のビジネスの現場を経験し、「徳のある経営」を追究する笠倉氏が、禅の言葉やエピソードを現代的な視点で紐解き、悩みを取り除くためのヒントを贈る。

堂々めぐりの議論

中国は唐の時代に禅宗が大変盛んになり、歴史に名が残る偉大な禅者が何人も輩出されました。その中の一人に、南泉がいます。

南泉といえば、「南泉斬猫」という大変有名な禅話があります。

す。僧侶である南泉が、弟子たちの前で猫を斬り捨てたという物騒な話です。

生き物をむやみに殺してはいけないという戒律のある仏教僧が、なぜ猫を斬るような殺生をしたのでしょうか？ そこにはどのような意味があるのでしょうか？ 以下にご紹介しましょう。

ある日のこと、南泉の禅道場で、東西の禅堂の弟子たちが、一匹の猫をめぐる争っていました。当時のお寺では貴重なお経をネズミがかじるので、ネズミよけに猫を飼う習慣があったそうです。その中の一匹の猫について、東側の禅僧が「こちらが先に拾ったのだから、こっち

の猫だ」と言うと、西側の禅僧

が「いや、こちらがエサをやっているから、こっちの猫だ」と言って、争いが始まりました。

厳しい修行に明け暮れる修行者にとっては、初めは息抜きの遊びだったのでしよう。

そのうち、「猫のような動物も、人間と同じように成仏できるのか？」などと難しい議論が始まり、たいそうな騒ぎになりました。禅の修行者といえども

普通の人間ですから、未熟なうちは頭に血が上ることもありま す。お互いのメンツをかけて、議論はああでもない、こうでもない、と堂々めぐりになり、騒ぎが大きくなりました。

現代の会社の会議でも、アイ

デアを出す段階が終わって、結論を出すべき時になっても、決め手を欠いて結論を出せずに、延々と会議が続くことがあります。やがて時間切れになって次回に持ち越しになり、貴重な時間が浪費されたりします。この禅道場での猫をめぐる騒ぎも、それと似たような状況だったのでしょうか。

弟子たちの騒ぎを聞きつけた南泉は、いきなりその猫をつかまえると、弟子たちの面前につきつけて言いました。

「さあ、この猫について、お前たちの意見をはっきりと言え！ 正しいことを言えたら、この猫を許してやるが、言えなかったら、猫を斬る！」

笠倉健司

かさくら・けんじ*1961年生まれ。'80年早稲田大学入学後、在家で臨済禅の修行に打ち込む。また、安岡正篤氏の思想に傾倒し、東洋哲学を学ぶ。卒業後、高校講師を経て、'92年公認会計士試験に合格。大手監査法人などで活躍する中で「人間性尊重の経営」を志向し、退職して有徳経営研究所株式会社を設立。人間学を基礎とした「徳のある経営」の研究と人財開発支援を行なっている。

南泉は、片手に猫を引っさげ、もう一方の手に作務で使う草刈り鎌を持って、すごい形相で弟子たちをにらみつけました。それまで盛んに議論をしていた弟子たちは、師匠の南泉の勢いに恐れをなし、皆しゅんとして何も言えなくなりました。すると、南泉は持つていた草刈り鎌で、猫の首を斬ってしまった、というお話です。

もつとも、南泉は実際に猫を斬り殺したわけではなく、斬る真似をしただけで、放してやったものと思われれます。中国では伝統的に、「白髪三千丈」(「年老いて長年の憂いのために、白髪が九キロメートルもの長さになってしまった」)のように、誇張した表現を好みます。この逸話は、元の漢文では単に「猫を斬る」となっていますが、弟子を指導するのに、わざわざ猫を殺す必要はないでしょう。あくまでも文学的な表現であると理解したいものです。

それにしても、猫の首を斬る真似だけでも、仏教の「殺生戒」(生き物を殺してはいけない

という戒律)の精神に反する行ないです。禅道場の指導者で仏教僧である南泉が、なぜそのような行為をしたのか。その南泉の真意が、この禅話のポイントになります。

自分の所有物は この世にない

結論的に言うと、南泉が斬ろうとしたのは、猫そのものではありませんでした。弟子たちの妄想を斬り捨てようとしたのです。

妄想といつても、夢のような怪しい話のことではなく、頭で考えた屁理屈のことです。禅の世界においては、事実をありのままに見ることが重んじられます。そのため、事実を離れて、あれこれと頭で考えた屁理屈は、すべて妄想であるととらえるのです。

そもそも、猫を誰かの所有物と決めることができるのでしょうか? 現代の感覚でいえば、ペットは飼い主の所有物ですが、禅的な見方に立つと必ずしもそうではありません。

達磨大師が伝えたときされる「一心戒」では、「不偷盗戒」(他人の物を盗んではいけないという戒律)について、次のように定めています。

「不可得の法において、可得の見を生ぜざるを名づけて、不偷盗戒となす」

現代語に訳すと、「本質的には個人の所有物ではない万物の存在について、所有できないと考えるのが、『盗みをしないこと』である」となります。端的に言えば、「この世の中に自分の物と言える物は、何一つない」という意味です。よって、財産については、社会の物をしばらく預かっているだけであるにとらえます。

現代的な感覚で「自分の財産は自分の物」と考えたとしても、現実に長期的に財産を保持することは、意外に難しいものです。自分一代であれば、多額の財産を保持できるかもしれませんが、変化の激しい現代では、世代を経るにつれて資産を減らすリスクも大きくなります。時には、投機にはまって巨額の財産を一

気に失うようなことも起こります。

では、財産ではなく自分の身体はどうかというと、これも天からの預かり物であり、自分の自由にはならないものといえます。誰も望んだわけではないのに、病気をしたり老いたりして、やがて必ず死ぬ時が来ます。永遠の健康を保てる人は、この世に一人もいません。

このような現実の姿を素直に見つめれば、「何かを自分の物にできる」という考え方自体が一つの執着であり、妄想ではないかといえます。禅は、心の執着から自由になることを理想としていますので、その理想から見れば、「何かを自分の所有物として自由にできるといって考え方は、天から物を盗むことと変わらない」ということなのです。

我執を乗り越える 発想が必要

南泉の弟子たちは、猫の飼い主をめぐる争いに始まり、ややこしい仏教学の問題になって、

お互いの考えに執着して言い争いました。そのうちに、出口のない堂々めぐりの議論になります。それを見た南泉は、「自分の思い込みにとらわれずに、この世の真実をしつかり見なさい」とばかりに、議論のきつかけとなった猫を斬ったのでした。

「猫を斬る」というのは一種のショック療法ですが、なぜそこまでするのかというと、人間の我執がとても根強いからです。これは自分のものだとか、自分の言い分が正しいとか、人は誰でも自分にこだわります。自分への執着は生存本能の裏返しでしょうから、ある程度はやむをえないことですが、度が過ぎれば害となります。

本能に根ざす強い我執は、しばしば強い思い込みになって表れます。それを乗り越えるためには、時には非常識な発想が必要になるというのが、ここでの教えです。

また、それほど思い込みが強くななくても、現実の状況が厳しくて、いくら考えても判断がつか

かないような時にも同じことがいえます。チームのリーダーになれば、いくら検討しても結果の良し悪しが予想できない中で、決断を求められることもあるでしょう。そのような苦しい時に、失敗のリスクを負って決断できるかどうか、まさにリーダーとしての勇気が試されます。

そこでリーダーが失敗のリスクを恐れ、全体の利益よりも自己保身を優先すると、しばしば間違った方向にチームを導くこととなります。困難の中で利己的な考えを棚上げして、冷静に判断するためには、我執を抑える発想が必要です。「南泉斬猫」という禅話は、我執を乗り越えて、時には思い切った決断をする必要があることを私たちに教えているのです。

シンプルに 現実そのものを見る

先にも触れましたが、禅ではシンプルに考え、現実そのものから離れないことを大事にします。「真理は現実の中にあり」という発想法です。

私たち凡夫は、自分の考えにとらわれると、しばしば現実が正しく見えなくなり、間違った方向に進んでしまいます。そうならないために、情報をたくさん集めたり、論理的な思考を積み重ねたりするわけですが、一つひとつの情報や理屈は正しく見えても、最終的には、現実離れた誤った結論になることがあるのです。公認会計士である私の経験から言えば、データと理論を重んじる会計の世界でも、時々そのような困った現象が起きています。

理論的に検討した結論に違和感がある時は、細部にとらわれずに全体的に考え直して、常識的におかしな点がないかを確認する必要があります。常識的に考えておかしいと感じる結論には、どこかに事実認識の間違いや理論の適用間違いがあるというものが、会計士の世界における経験則です。

全体的に考え直すということとは、専門家の視点を忘れて、あえて世間の視点でシンプルに考えてみるということでもありま

す。専門家ほど、専門にとらわれて視野が狭くなりがちだからです。

専門家が納得しても、世間一般の人から見て腑に落ちない議論は、どこかに間違いが潜んでいることが多いものです。これは、会計の世界だけではなく、ビジネス全般にいえることではないでしょうか。

汚れた草履を頭に載せる

南泉は「猫を斬る」という大芝居を打って、弟子たちの妄想を斬り捨てました。猫は私たちの迷いの象徴であり、理屈であれこれと考えすぎて真実を見失いがちな私たちの心そのものを表しています。妄想や迷いを捨てて、事実をありのままに観察して素直に正しく受け止めようとするのが、禅の発想法なのです。

さて、この禅話には、まだ続きがあります。

南泉の一番弟子に、趙州という禅者がいました。禅宗史上に名高い偉大な人物です。南泉

が猫を斬る事件は、たまたま趙州が使いで不在の時に起こりました。

夜になって道場に戻ってきた趙州に、南泉が昼間の猫の話をする時、趙州は奇妙な行動をとります。自分が履いてきた草履をいきなり頭の上に載せると、何も言わずにスーと部屋から出て行ってしまったのです。

これを見た南泉は、「お前がいたら、猫を斬らずに済んだものを！」と、大いに趙州を誉めました。

趙州が汚れた草履を頭に載せたのは、「この世の中に自分の物は一つありません。すべては天からいただいた物、ありがたい預かり物です」ということを示しています。南泉の思いを汲み取って、「師匠の教えをありがたく頂戴します」という意味も込められていたのでしょうか。趙州は、南泉の教えを無言のうちで全身で受け止めたのでした。猫を斬る真似をしたり、草履を頭に載せてみたりと、やっていることは、まるで奇妙に見えますが、昔の禅匠はそれぞれ

に深い意味を込めてやっています。南泉も趙州も、仏教の深い教えを伝えるために、あえて言葉で説明せずに、芝居のようなことをしているわけです。そこが禅の特徴であり、面白さでもあります。

なぜ言葉で丁寧に説明しないのかというと、言葉による説明は人をわかつた気にさせるからでしょう。言葉や理論を覚えることで、それだけで複雑な現実問題をさばけるような錯覚に陥ることがあります。

しかし、現実世界は言葉ですべてを説明できるほど単純ではなく、常に複雑で矛盾に満ちています。そのような現実に立ち向かうには、「他人の言葉を覚えてわかつた気になる」ことよりも、「常に疑問を持って自分の頭で考える」姿勢が大事です。言葉を覚えて満足しがちな私たち凡夫に対して、あえて意味不明な行動をしてみせて、大きな疑問を呼び起こすのが、禅の手法といえるでしょう。

なお、このような禅話は、その心を受け止めるべきであり、

形を真似してはいけません。意味もわからず奇妙な振る舞いをするれば、単なる野狐禪、インチキ禅になってしまいます。その点を間違えてはいけないと思います。

松下幸之助氏の言葉に学ぶ

この禅話に関して、松下幸之助氏の次の言葉が思い出されます。

「自己を捨てることによってまず相手が生きる。その相手が生きて、自己もまたおのずから生きるようになる。これはいわば双方の生かし合いではなからうか。そこから繁栄が生まれ、ゆたかな平和と幸福が生まれてくる」

「自己を捨てる」とは、南泉の教える「我執を乗り越え、思い込みにとらわれない」と通じています。「自己を捨てること」によって相手が生きる。「双方の生かし合い」という松下幸之助氏の言葉は、利益ばかりに気を取られる現代人に対する頂門の一針（急所をついた教

訓）です。私たちが競争社会の中で忘れがちな「和の精神」を思い出させてくれる名言であると思います。

また、困難な時の生き方について、松下幸之助氏は、次のような言葉を残されています。

「断じて行えば、鬼神でもこれを避けるという。困難を困難とせず、思いを新たに、決意をかくたく歩めば、困難がかえって飛躍の土台石となるのである。要は考え方である。決意である。困っても困らないことである」

困難から逃げず、正面から受け止めて、飛躍の土台石にするという力強い言葉は、松下幸之助氏のような人生の達人ならではの発想かもしれせん。私のような凡人には、なかなか真似のできないことですが、困難から逃げると、よりいっそう困難な状況を招くことは、世の中でよくあるのではないのでしょうか。飛躍の土台石とまではいかなくとも、せめて困難から逃げず、前向きに立ち向かう気持ちを大事にしたいと思います。